
Asura Cryin' 優しい物語

BALDR SKY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A s u r a C r y i n '

優しい物語

【Nコード】

N 8 5 2 9 P

【作者名】

B A L D R S K Y

【あらすじ】

私立洛芦^{かんざき}和高校そこに異質な少年が転校してきた。

彼の名は神咲^{れん} 錬

錬が幼馴染の女の子らと会うことで運命の

歯車は回りだす。

EX1 動き出す歯車（前書き）

二作目です。

一作目もよろしくお願いします。

今回は回想です。

EX1 動き出す歯車

回想

? side

? 「鍊〜!こっちだってば!はやく〜」

勝気な女の子俺をせかす様に呼ぶ。

? 「はやく〜〜」

双子の女の子二人が声をそろえて言う。

? 「うんうん・・・」

弱気な女の子が静かにうなづく。

? 「ちょっと待てよ〜そんなに急ぐと転ぶぞ〜」

俺が四人の女の子に呼ばれ、追いかける・・・

? 「「大丈夫、鍊(君)が守ってくれるから!」「「「

声をそろえて言う四人。

？「やれやれ・・・」

俺はそれを聞きあきれながらも、嬉しい気持ちになった・・・

回想終了

？「夢か・・・。あいつらに会えるかな？なあ二人とも？」

一人の少年の視線の先には二人の半透明の女の子がいた。

? side out

EX1 動き出す歯車（後書き）

次回から本編です。

EX2 鳴桜邸 (前書き)

今回結構穴だらけかも・・・
質問とか意見があったらじゃんじゃんして下さい。

それでは少ない本文どうぞ

EX2 鳴桜邸

鍊side

？「起きて！鍊！起きてってば！」

遠くから聞こえるような声で俺は重いまぶたを開ける。

鍊「んゝ。どうした？アリス？」

アリス「つとに！どうしたじゃないよ、到着したよ！わたしがいなかったらどうするの？寝たままなの？」

鍊「アリスが起こしてくれると思ったから安心して眠ったんだよ。第一俺らが離れるなんて考えらんね」

アリス「・・・／＼。とっ、とにかくついたわよ。降りるんですよ。ここで」

鍊「ああ。ところでアリアは？」

長時間電車の中にいたため、多少体が痛い。

アリス「ん→」

アリスが上を指差す

鍊「上?・・・いた」

アリア「んんっ。」

寝ていた。俺と同じようにとりあえず寝ていた。

それもとても気持ちよさそうに。何の夢を見ているのか?

「れんゝ。んふふふ、・・・・えへへへ。」

傍から見ていると気持ち悪い。どうやら俺が夢に出ているらしい。

俺が夢に出ているとアリアは大抵こんな風に幸せそうだ。

鍊「おっ!やっぱ仲間だな。さすがアリア♪」

アリス「馬鹿言っていないでさっさと起こして。この子鍊が起こさないとい向に起きないの、まったくどうして二度寝なんてするのよ」

鍊「だって電車の揺られ具合が絶妙でさ。ついつい寝ちゃうんだよ。ほらアリア起きろ」

アリス「んにゃ。ううんどしたの？ 錬〜？」

ようやくアリアが起きた

錬「ついたってさ。」

アリス「そなの〜？」

アリス「ええ着いたわ。それで錬？ 早くここから離れたほうが言いわ」

錬「どうして？」

アリス「周り、不審がっているわ」

周りを見渡す。俺達、厳密に言う俺を見て周りの人たちが影から話していた。

「ねえあの人一人で喋っているわ。」 「ええ。気持ちわるいわね」

地味に傷つくなあ・・・。

とりあえず俺は電車から降りてこの空間を出た。

アリア「待ってよ〜！」

アリス 「本当に、世話がかかるんだから」

そういいながら俺を追いかけて来る彼女達は
浮いていた。

鍊爆走して何分か経過・・・

鍊 「はあはあはあ・・・」

アリア 「大丈夫？ 鍊？」

俺の頭の上に乗りながら聞いてくるアリア。

鍊「だ・・だい・・丈夫。」

アリス「決して大丈夫そうには見えないわね」

俺の答えにやれやれといった感じに答えるアリス

鍊「っと。目的地までどれくらいだ？」

アリア「直貴が記した地図にはこの辺かな？」

アリス「あと少しよ」

鍊「そうか。」

アリスとアリアのガイドの下俺は再び歩き出す。

アリス・シュトラトゥス、アリア・シュトラトゥス、彼女らは俺の幼馴染だ。アリスは金髪碧眼、容姿端麗、冷静沈着俺やアリアを世話してくれる姉的存在だ。

一方アリアは金髪灼眼彼女も容姿端麗。だがアリアは純真無垢俺とアリスがほっておけない妹みたいな存在だ。

二人の容姿が似通っているのは双子だからだ。まあ言ってみれば美少女の双子だ。いきなりだが二人の姿は透けて

いる。これには理由がある。
まあそれは追々話そう。

鍊「ったくなんだよ直貴の野郎は。いきなり日本に行けて。お前の利益になるって……」

夏目直貴

俺より年上の偉そうなやつ。まああいつの言うことは間違えがないから来たが。なんなんだ？ 一体

アリス「鍊こういうっちゃなんだけど直貴はあまり信用しない方がいい、直貴は何か大きなことを隠してる……」

アリスが言う

鍊「分かってる。まあ俺もあんまり信用していないさ。あいつとは利用、利用される立場だ」

アリア「うーん。そんなに悪い人には見えないけどな」

鍊「悪いやつではないさ。ただ考えが読めないから信用できないんだあいつは……」

アリス「そう。まあ鍊についていだけよわたしは・・・」

アリア「うんうん。っとここじゃない？」

鍊「×丁目×番地。ここだ！」

アリス「大きいわね。」

俺達がついたところは鳴桜邸。直貴が一時期住んでいたところらしい。なんでも日本に行く場合はここで生活しろってさ。

キーーーーー

門を開ける音がやけに大きく聞こえる

鍊「・・・化け物屋敷か？ここは？」

アリア「あはは♪すごい。」

学校でもないのに桜が咲いてるし、暗いイメージの洋館だな。アリアは楽しそうに叫んでいるし、アリスは無言。

カチャカチャ・・・カチン

直貴からあらかじめもらっていた鳴桜邸の鍵を使って中に入る。

鍊「けほっけほっ。埃っばいなあ、とりあえず掃除かな」

アリス「そうね。とりあえずそ鍊が生活できるように今日中にやらないとね」

アリア「よし。じゃあやるよ♪」

アリア・・・やるつつつても実際作業するのは俺なんだけど。

鳴桜邸掃除中・・・

鍊「・・・・・・・・なあアリス、アリア・・・」

アリス・アリア「・・・・・・・・なに？」

鍊「なんで家について言うか屋敷にこんなものがあるんだろうな？」

アリス・アリア「さあ？」

俺達は地下室を見つけ、中に入る。

そして俺達の目の前にあるのは機関銃。決してモデルガンではない。本物、実銃だ。

それも一丁二丁ではない。数え切れないくらいにだ。アサルトライフル、バズーカー、ランチャー、ガトリング、ショット、ハンド、まさに拳銃の展覧会みたいな感じだ。

アリア「鍊。これどうするの、もし警察にでも見つかったりすると銃刀法違反だよ。はわわ・・・逮捕されちゃうよ」

アリアが顔を青くして言う。

15歳で警察にご厄介・・・・・・・・なんとしても避けねば！

鍊「幸いここは地下だし見つかりにくい放置しとこう」

アリス「でも銃器って管理されないと危険よ。」

そうなんだよ、暴発↓屋敷おじさんは勘弁してほしい。
はあ……ん？これは……

アリア「どしたの？鍊」

アリアが真剣な顔になった俺の顔を伺い見る。

鍊「……綺麗過ぎる、ここだけ。」

アリス「どうゆうこと？」

アリア「？」

鍊「ああ。上の階は入ったとき埃が舞うほどだった。たしかにここもだけど銃器だけ新品同様だ。つまり……」

アリス「誰かが銃器を管理もしくは使っている？」

アリア「えええええー！ー不法侵入じゃん！」

鍊「多分……だけど直貴からはそんな話は聞いていないし……」

ピンポーン

俺達が考えに耽っていると屋敷のチャイムが鳴った。

鍊「誰だろ？」

アリス「さあ・・・」

アリア「分かんない」

俺は思考を中断して、とりあえず出てみることにした。

n
e
x
t

t
o

E
X
3
!
.
.
.
.

EX2 鳴桜邸 (後書き)

名前を考えるのが大変でした。

特にアリスとアリアが。ファミリネームのほうも。

あつ特に名前やファミリネームに意味なんてないので悪しからず。

それではEX3でまた、バイバイ！

EX3 黒崎朱理 (前書き)

試験災厄だった・・・
燃え尽きた・・・

EX3 黒崎朱理

鍊side

俺は今鳴桜邸のリビングで黒い女の人の前にいる

?「・・・・・・」

その女の人は俺を観察するようにじっとしている。
なぜこのようになったのかは回想を見てくれ。

回想・・・

鍊「はいは～～いっと」

地下の銃器の発見後突如来た人を迎えに俺は玄関へと向かった。

ガチャ

扉を開け、確認するとそこには眼鏡をかけ、全身黒いコートを着た俺より年上であろう人が立っていた。
ついでに綺麗な人だ……。

？「こんにちは……」

鍊「はあ……こんにちは。どなたでしょうか？」

挨拶をして尋ねる。

？「あなたが神咲 鍊君でいいかな？夏目直貴さんの知り合いの……」

俺の質問には完全無視、逆に聞いてきやがった。

鍊「ええ。合ってます。僕が神咲 鍊です。それで直貴の友人ですか？」

？「ええ。話があるので中に入っても？」

ええ。まだかたづけの最中なのにな。・・・でも直貴の知り合いらしいし、話聞か。

鍊「ええ、いいですよ。入って左のリビングに行ってください」

？「ええ、分かったわ」

なぞの女の人を招きいれ、誘導する。
すると変わった匂いが漂った。

鍊「（この匂いは・・・火薬？）」

少し気になったが思考は後にして俺も彼女の後を追いかけた。

回想終了・・・

鍊「えーと、改めてあなたは誰ですか？」

お互いにソファにすわり対面する。アリスとアリアは僕の隣で座っている。もちろん謎の女の人には見えてない。

？「私は黒崎朱理、洛芦和高校科学部の部長代理しているわ」

全身黒コートの黒崎朱理は口元を上げて笑顔で名乗った。

鍊「はあ、用とは一体？」

それが一体なんだってんだろう？科学部？
俺が心の中で考えていると、

朱「あなたをスカウトに、最強の操縦者さん♪」
ハンドラー

！・・・そうゆうことか。

鍊「・・・直貴か。」

一番ありそうな可能性を出してみた。案の定、

朱「さすが現在アスラマキーナを使うもののなかで一番強いといわれるわね」

正解らしい。まったくあいつはべらべらと・・・

鍊「そんなことより他に直貴は何か言ってなかったですか？」

俺が不機嫌に聞き返す。

朱「いいえ、何も」

鍊「分かりました。考えておきます」

朱「よろしく〜♪」

来た時とは打って変わって、飄々としていた。
そして黒のロングコートをきた黒崎朱理は帰っていった。
変わった人だな。

アリア「なんだったんだろ」

アリス「さあ、勧誘かしら」

鍊「いや、それだけじゃない」

アリア「？」

鍊「あの人からわずかに火薬の匂いがした。おそらくあの人だ。この銃器を使ってるのは」

アリス「ってことは一般人じゃないということね」

鍊「銃器を持ってる、一般人って言わないと思うけどな」

アリア「そうなの？」

いや、そうだろ……

鍊「まっ敵対することはないな。直貴の知り合いらしいから」

アリア「そうだね。っと鍊もうそろそろ夕食の時間じゃない？」

辺りはほんのり薄暗くなっていて、夕日も落ちてきている。

鍊「ほんとだな。掃除やらなんやらで気づかなかった」

アリス「明日は学校初日なんだから早く寝なさいよ」

鍊「分かってる。」

俺は明日の初登校で何を話すべきか考えながら床の就いた。

燃えている・・・・・・・・

あたり一面火の海だ・・・・・・・・

？「ああああああああああああああああああ」

そこでひとり大きな声を出し手いるひとりの少年がいた。彼の腕の中には二人の少女。

一人は頭から血を出し、ぐったりしている。

もう一人も頭ではないがお腹の部分から血を流している。

その少年はただ叫んだ。叫び続けた。

何もできない自分に怒りがわく。何もできなかった自分に・・・・・・・・
ただただ悔しさや悲しさで叫び続けた・・・・・・・・

鍊「ああああああああっ・・・・・・・・っはあ・・・・・・・・はあ。
・・・・・・・・はあ・・・・・・・・。夢か・・・・・・・・」

嫌な夢だった・・・・・・・・。

時刻は六時より少し前。二度寝しようかとも思ったが、起きられなくて一日目初日に遅刻って言うのは勘弁願いたかったから起きた。それに先の夢がまた出ると思うとどうしてもまた寝たいとも思えなかった・・・・・・・・

俺は学校の準備をし始めた・・・・・・・・

アリス i d e

アリス「忘れ物ない？転校の書類とか持った？」

鍊「あっ・・・・・・・・・・ははは取りに行ってくる・・・・・・・・」

相変わらずのこの光景。アリスが鍊の世話をしている風景・・・・・・・・

アリア「ねえアリス・・・・・・・・」

鍊が家に書類を取りに行っている間に私はアリアに聞く

アリス「なに？アリア」

アリア「また鍊うなされてた・・・・・・・・」

アリス「そう・・・・・・・・またあの夢を・・・・・・・・」

鍊は時々っていつでも週に二、三回嫌な夢を見る。いつも同じ夢・
・

わたしたちが怪我をして死にそうになっている夢を・・・

アリス「何とかしてあげたいけど、夢じゃどうしようもない」

アリア「うん・・・・・・・・」

そのとおりだ。仕方がない・・・・・・・・けど・・・

鍊「っとおまたせ！二人ともよっしいくぞ！」

そこで鍊が走って戻ってきた。

アリア・アリス「うん！ええ。」

不謹慎かもしれないけど私は嬉しかった。最終的に鍊とずっといられるようになったから。
アリスもそれは同じみたい。
私達は鍊が大好きだった。

鍊「アリア~~~~！早く~~~~！」

いつの間にか鍊とアリスは先に行ってしまった。
・・・感傷終了！
さっ鍊たちと行こう！

g
o

t
o

n
e
x
t
!

EX3 懐かしい顔ぶれ（前書き）

ごめんなさい。なのはの方をひたすら書いていまして
こんなの遅れてしまいました。

EX3 懐かしい顔ぶれ

私立洛芦和高校・・・

鍊side

割と大きな校門。の前にいる俺。

周りには登校する生徒がちらほら・・・。

鍊「ここか・・・」

アリア「鍊、最初が肝心だよ！転校は・・・」

横でアリアが胸の前で拳を作って気合を入れるポーズをとる。

ぶっちゃけそれがかわいいポーズにしか見えん。

鍊「分かってるさ。ここには結構な日数いるつもりだしな。仲良くするさ。そのためには第一印象もよくする。」

冷静に言って二人を見る。

アリス「分かっているならいいわ。さていつまでも突っ立ってないで行くわよ。周りの生徒から注視されてるわ・・・」

またかよ・・・

生1「ねえあの子だれ？見かけない子だけど・・・」

生2「さあ〜でもかっこよくない？」

キヨロキヨロ

ん？どこにかっこいい人が？
ん〜？どこにもいないぞ・・・

アリア「錬のことだよ・・・。」

錬「またまた〜そんな事あるわけねえじゃん。だって俺なんて普通だぜ？」

アリス「・・・そう思ってるのはあんただけ。それにそんな事言ったら全国の男子ほとんど全員敵に回す事になるわよ・・・」

ここで鍊の容姿を紹介。

髪は白。目は漆黒。

背は168センチほど。

背中の中腹あたりまでの長い髪をポニーテールにくくり、それがさわやかさを際立たせ、快活そうに見える。

また人当たり良さそうな顔であり、母性をくすぐるような姉系の人には構わずにはいられないといった感じもする。

本人は無関心だがかなりのイケメンである。

鍊「そうか……まあいいか。とりあえず職員室に行くぞ。」

アリス・アリア「はーい！」

こうして俺らは洛芦高校の校門をくぐった……

担「ここで待っていないさい。呼んだら入ってくるように」

そういつて若い男の担任は眼鏡を掛け直し、教室へと入っていった。残されたのは俺とアリス、アリアのみ。

アリア「ねえ、あの二人どうしてるかな？」

アリス「ふたりって・・・あの二人？」

アリア「うん、そう・・・」

いきなりそんな事を言い出すアリア。二人とは俺の幼馴染だ。

一人は勝気でしょっちゅう俺にちょっかいかけてきて自爆する面白い奴。

もう一人は大人しめのあまり喋らない子だ。どっちかって言うとう下手なのだ。その子。

だがそいつ俺の前でだけはしっかりものを言う。前理由を聞くいて見たときなんでも俺がいると心強いとかなんとか・・・

担「え、今日は転校生がいる。入ってきなさい・・・」

っと御呼ばれた。

アリア「頑張るんだよ」

アリス「私達がついているわ・・・」

二人の温かい声援に緊張がほぐれ、強張った背中を押された。全く二人には叶わないな。

俺は苦笑いしながら教室へと足を踏み入れた。

カッソッカッソッ・・・

俺の履く靴が床を打つ音がやけに大きく聞こえた。それほどまでにクラスが静まり返っていたのだ。

クラスのみんなの好奇の瞳が俺を射抜く。

咳払いをし、声が震えないように心がける。

鍊「神咲 鍊だ。少々事情があり日本に来た。今は一人暮らしだ。前はロンドンにいた。久しぶりに来日したのでよろし（ああああああああああああああああ！！！！！！！！！！）誰だ！！俺の紹介を最後に妨げる奴は！！」

くそっ！あと少しで言い切れたのに。

俺は不届き者に視線を向けた。身長は俺より少し低い。160程度か。大きな目くりつとした目にすらりとした手足。

これだけみても結構な美少女と言う事が分かる。まあ俺はアリスやアリアで見慣れているが。

俺は視線を徐々に上げ、顔を見る。

・・・・いや、まさか。あいつがいるはずが・・・・。

俺はその顔に見覚えがあったが振り払い、考えをなしにする。そして彼女はこちらにやってきた。やはり、美少女だった。

？「ねえ、まだ分からないの？鍊」

鍊「まさか・・・・操緒か？」

操「ええ、そうよ。私よ」

つゝんふてくされて答える操緒。どうやら俺が気づかなかったと思っているらしい。

鍊「ふて腐れんなよ。一番最初にお前の顔が思い浮かんださ。」

操「じゃあなんで知らないふりなんてしたのよ？」

鍊「お前があんまりにも綺麗になってたんで分からなかったんだ。悪かった。」

操「／＼／＼ふんっ！そ、それよりも鍊あの子誰だと思う？」

操緒が赤くなりながら指差す。その方向には俺の目の前の列窓際で前から4番目の女の子を刺していた。

俺とは色違いの長い髪。そいつは俺の視線を受け、赤くなりながら下を向いた。

この反応……再びまさか……

鍊「奏……か？」

名前を呼んだ途端に一層に顔を真っ赤にする奏。

操「ピンポーンン！大正解！！ほらかなちゃん、出てきて！！」

そう言って奏を連れてくる操緒。

奏「ひ、久しぶりです。鍊君」

弱々しく言う奏にやっぱり奏だと再認識した。

鍊「ああ、そうだな。だがなんで敬語なんだ？俺らは友達なんだからいらねえよ」

奏「あ、はい（ん？）えっと・・・うん・・・」

また敬語を使おうとしたところを俺が聞き直した。
相変わらずだな奏は・・・くくく。

変わらない彼女達に笑いが止まらなかった。

担「あの・・・もう授業始めてもいいいか？」

腕時計を指で指しながら睨んでくる担任。すっかり忘れてた。

鍊「すみませんでした。続けてください・・・」

担「お、おう分かった。」

俺が意外にも敬語を使った事に驚いたのか担任は慌てて場を仕切り出す。

しかし俺と操緒、奏以外のクラスメイトらは訳が分からないといったように頭の上に？を浮かべていたのだった。

日「きりーっ、礼」

日直の声でやっと朝のSHが終わり息をつく。がそれは叶わないものだった。

なぜなら一斉に俺の元にクラスの連中が駆け寄ってきたからだ。ちなみに俺は窓際の前から五番目。

と云うことで前には奏。隣には・・操緒。なんでも俺の世話係らしく担任の配慮だった。ありがたや・・・さてと・・・これどうしようか・・・

男1「なあロンドンのどこにいたんだ？」

女1「どうして髪が白いの？」

男2「水無神と嵩月とはどうゆう関係なんだ？」

女2「付き合ってる人いるの・・・？」

・・・一斉に質問を投げかけられ、俺は迷う。俺は聖徳太子じゃねえんだから一斉に人の話しが聞けるかっての！！

パンパン

操「はいは・・・い。そんな風に詰め寄ると鍊もどれに答えたらいいかわからないでしょ。順番に・・・」

手を叩きながら仕切り出す操緒に後光が差して見えた瞬間だった。ありがとう・・・操緒様！！

女1「はいは〜い最初は私！付き合ってる人はいる？」

さっそくか・・・この手の話しほんとに女子は好きだね〜

鍊「いないぜ。第一、俺かつこよくないし、こんな顔を好きになる奴いるわけねえだろう？」

女1「またまた〜謙遜しちゃって〜神咲君がそんなこといったら世の中の男全員ミジンコよ〜」

周りにいた男子が一斉にぐあっと呻きだす。
？訳分からん・・・

操「相変わらずだよね。鍊・・・はいっ次！！」

なんか呆れられた。

男1「はい、ロンドンのどこに住んでいたんだ？」

鍊「ああ、知ってるやつはいるかもな。ベイカー街だ。」

クラス「おお〜〜」

どうやら知っているらしい。まあシャーロックホームズとかで結構有名だからなあそこは・・・

俺がどうしてそこにいたのかというとアリスとアリアの実家がそこにありアリスたちのお母さんとお父さんに世話になっていたからだ。俺の両親はアリアとアリス二人が事故に巻き込まれた時に逝ってしまった。

その時アリアらの両親に引き取られたんだ。おじさんとお婆さんは

とても優しく俺の両親みたいになってくれた。

キーーーーンコーーーーーンカーーーーーンコーーーーーン

操「タイムアップ」。ほら席について。次英語だから厳しいよ」

みんな「ええ」

質問がチャイムで途切れ、操緒がみんなに言う。

みんな不安顔で言うが仕方ないと言って、自分の席に帰っていった。前を見ると奏もなんだか楽しそうに操緒をみていた。

t o b e c o n t i n u e d ! ! ! !

EX3 懐かしい顔ぶれ（後書き）

っというわけで操緒ちゃんと奏ちゃんを登場させられました。

次回がいつになるか分かりません。なのはのほう次第かも。

EX4 人の家では仮面をとれよな？（前書き）

投稿遅れました・・・

楽しんでください

EX4 人の家では仮面をとれよな？

鍊side

ポコポコ

なんだ？なんか頭がぐらぐらする……。ああ俺今寝てんのか……。じゃあこの頭の痛さはなんだ？

ポコポコ

しかも一定のリズムで流れてる……。

操「……い」

奏「だ、……。だよ……。……ちゃん」

遠くで聞くような会話。とりあえず操と奏だということは頭が夢心地でも分かった。

まだ頭が痛いが二人の話し聞いてみるか……。俺は未だ寝続けていると思うている二人の会話を隣で聞く。

尚も痛いぜ頭・・・

操「いいのよ、かなちゃん。こいつが眠ってるのが悪いんだから・・・」

ポコッ

ん？操緒が言った途端に頭が痛くなった？

奏「でも・・・鍊君は疲れているんだよ。だからしょうがないよ・・・」

相変わらず優しいよな奏って・・・

操「ほんとかなちゃんは鍊に甘いんだから！いいのよこいつなんて叩いて何ぼでしょ！」

・・・お前も相変わらずだな・・・操緒。
なるほどこいつが人の頭をポコスカ叩いていたから痛かったわけか・・・

操「さてそろそろ起こすかな？」

まったく人が寝ていると思って今度は手加減なしのノートアタックか？
・・・いい事思いついたぜ♪

操「ふっふ・・・この操緒ちゃんを前にして暢気に眠れると思うな

よ～～！！！！なにっ！！？？」

操緒がその手にノートブレードを手に俺の脳天を目指して振り下ろそうとする。

がすばやく手をだしそれを受け止めた。

鍊「な・に・を・し・て・い・る・の・か・な？操緒さん？」

操「げっ！鍊！起きてたの？」

俺の手にノートブレードを受け止められ、焦りだす操緒。その顔は悪戯がばれた子供のようにだった。

鍊「そりゃあな～誰かさんがポコスカ人様の脳天を叩いてれば起きるもするぜ」

操「あはは～～よ、良かった。じゃあかなちゃん帰ろっか？（まて～～い）・・・な、何かな？鍊君・・・」

俺の声が余程恐ろしいのか君付けする操緒。それに加え、

奏「あう～～」

どうしたらいいのかと顔に浮かべながらオロオロする奏。

鍊「君は人の頭を殴って逃げるつもりかね？」

操「殴ってってそんな人聞きの悪いっ！！」

むむっまだ認めないか・・・

鍊「なあ操緒？」

操「な、なによ・・・」

鍊「俺の頭叩き心地良かったか？」

操「そりゃあ良かったにきま（ほほ～～）まづっ！！撤退！！じやあねまた明日！！」

ビュウウウウン

おお～～見事な脱兎な走りだことで。

操緒はその瞬発力のある足で既に教室の外に出てしまった。

む～～逃げられた・・・

鍊「ん？」

そこで足の裏で何か踏んでるものを発見した。消しゴムだ・・・それも掌サイズの・・・お！これで操緒にちよっとした仕返しが出来るぜ・・・やられっぱなしは趣味じゃねえ・・・ってか？

奏「鍊君大丈夫、その・・・頭・・・」

うんいつでも奏は俺の事を心配してくれるから大好きさ。

鍊「ああ大丈夫だが・・・あいつには少しお仕置きだな・・・」

俺は教室の窓を開け放ち、校庭を見下ろす。

奏「？」

奏が首を傾げるのを傍目で見ながら右手の親指に拾った消しゴムを置く。(どっかの電磁砲の女の子の必殺技を構える形)
そろそろだな・・・ちようどだ！

校庭をものすごい速さで駆けていく女生徒がいた。
操緒だ。

鍊「くっくく俺から逃げられると思うなよ？み・さ・お」

逃げる操緒の背を目で追いながら右手を向ける。
ターゲットロック・・・オン

鍊「ちつとは反省しろ！お転婆娘ゝ発射！！」

俺の右手から消しゴムが弾け跳び、見事な軌道を取りながら
操緒迫り・・・着弾。

操「ぷぎゃっ！！」

着弾後操緒はぴくぴくとまるで虫の息みたいな感じになってしまった。
それにしても・・・ぷぎゃっだってさ・・・くくく・・・しかも
あいつまぬけに倒れてるし・・・くくく・・・

鍊「あゝはは・・・あゝおかしい」

奏「れ、鍊君！？だめだよ！！」

ん？奏が珍しく俺に厳しい表情で向かってきた。やっぱ親友が倒されたら怒るか・・・しまったな・・・操緒の反応が面白そうだった

からつい悪ふざけしちまった。

奏「消しゴムをあんな風に使っちゃ!」

・・・・・・えっ・・・?

鍊「あの・・・奏。操緒はいいのか?」

口をあんぐりと大きく開けながら聞く。おそらく俺は今最も間拔けな顔をしているだろう・・・

奏「?・・・あんなのみさちゃんにはきかないと思うけど・・・
っというより先にやったのはみさちゃんだから・・・」

鍊「・・・ぷくっあゝゝははは。ほんとおもしろいなお前らは?」

俺が笑った事が意味不明なのかしきりに首を傾げる奏。

鍊「あゝゝおもしろゝ。やっぱ退屈しないねゝゝお前らといるとき
とと・・・奏帰るか?」

奏「う、うん／＼／／／」

鍊「何顔赤くしてんだ?熱か?」

右手を額に持って行き体温を測る。が・・・

ざざゝゝゝゝゝゝ

物凄い勢いで離れてしまった。軽く傷ついたぞ・・・

奏「だ、大丈夫だから・・・その・・・心配しないで／＼／」

鍊「お、おう・・・じゃあ行くか！」

奏「はい♪」

俺らは教室をすばやく出たのだった。・・・操緒？

校庭で見事に目回して寝てたから拾ってやって奏に任せたぜ？

A M 1 .. 2 5

鳴桜邸

鍊「ああああああああああああっっっ！！！！！！・・・
・・・
はあ・・・はあ・・・はあ。またか・・・」

昨日見た悪夢がまた出てきて俺は否応なしにも飛び起きた。

鍊「情けねえ……」

男が過去の夢ごときにいつまでも囚われてピーピー怖がってるなんてな……。

昂ぶった気持が治まりかけると体中に汗をかいているのに気づいた。

鍊「夜風にでも当たるか……」

気分晴らしにでもと思って俺は空中で眠り続けているアリスとアリアに気づかれぬようそっと部屋を出た。

一階

シュワシュワ……

台所から持ってきた炭酸ジュースをコップに俺は玄関に足を向ける。なんとなくさくらがみたかった。

家にさくらがあるというのも変な感じがしたがこんな感傷的になっている時にはいい。

風にゆらゆらと揺れるさくら。月光の光でその美しさは際立つ。

鍊「お前みたいに簡単だったらな・・・」

さくらに向かって独り言を言う。

俺、アリス、アリアは結構めんどくさいことに首を突っ込んでいる。それがさっきの悪夢だったり、アリスらが俺以外の人には見えないということにも繋がってくるんだが・・・

鍊「それで・・・？こんな真夜中から何かようかい？泥棒さん？」

俺の声はさくらの樹の根元に隠れていた奴に届いたようだ。

鍊「っ！いきなりかよ！！」

突如根元から飛びかかってきた泥棒に慌てて戦闘態勢をとる。首を狙った攻撃をかわし、さっきとはたち位置が逆となる。

鍊「こんなことされる筋合いはないんだが・・・」

俺の憎まれ口が聞こえたのか泥棒の動きが静止した。

？「・・・・・・・・っ」

しかしそれは一瞬の出来事で奴の手に紅蓮の炎が逆巻き、それは収束して炎の片手剣となった。

鍊「おいおい・・・それって反則・・・っ！！って今度はこっちか！！」

紅蓮の剣を見て言うとな度は背後からの殺気を感じして咄嗟に右に飛ぶ。

一回転して背後から襲い掛かってきたもう一人の敵を目視した。

鍊「そろいもそろって仮面かゝゝ？」

二人は薄いタオルを顔に巻きつけて目と口のみを晒していた。

一人は片目翡翠色もう片方が黒で黒髪の女。もう一人は紅蓮色の片目に黒。こちらは茶髪の女。

女かどうかは髪の長さで決めた。二人の髪の長さは俺と同じくらいのものであった。

いくらなんでも俺と同じ長さの髪を持つ男は少ないだろう？

鍊「さて・・・」

前方には黒髪の女。後方には茶髪の女。

見事に挟まれちゃった・・・か。

鍊「仕方ねえか・・・」

このままの状態だと何されるか分かったもんじゃねえ。

鍊「だがあくまでもこのままだったらだ・・・」

一人ぶつぶついつている俺に労を帰したのか二人が飛び掛ってくる。俺は二人が揃って火の剣と水の剣を突き出してきた僅かな隙間を見計らってそれぞれ剣を持った手首を掴み、同じところに投げ飛ばした。

? 1・? 2 「っ!!!」

空中で難なく受身を取り地上へ降り立った。

鍊「あせんなよ・・・今相手してやつから・・・」

俺は右手を両目の前に持ってきて目を閉じ、右手を横へ振りぬいた。

湧き上がる力とそれに似たさっきまでは感じなかった力。

それを体で体感した俺は目をゆっくりと開いた。

左目はさっきと全く変化していない。だが左目は・・・

湖のような薄い青色へと変化していた。無論これはコンタクトではない。

俺が一分前の俺とは全く違ったものへと変化した証拠だ。

そう・・・俺は今人間ではない（・・・）

悪魔へとなったのだ（・・・）

鍊「さ〜とと・・・お前らのことはすでに視させてもらった。お前らはもう俺に傷一つ付けられねえよ？どうする試してみるか？」

ニヤニヤと笑う俺の顔を見ながら二人はじりじりとにじり寄ってくる。

はあ〜やる気満々だな・・・。

シュツ

再び一斉に俺に取り掛かってくる盗賊共。

黒髪の女の左突きを右足の軸回転で回避、茶髪の女の右斜めからの縦切りを宙に逃げることで避ける。

空中で半回転、それから一回転をして地面に足を付けた。

? 1・? 2 「! ?」

俺の先ほどとは打って変わっての俊敏さに驚いているのが二人の纏っている空気から分かった。

鍊「だから言っただろ？傷一つ付けられねえって。まあこんなことも・・・出来るんだが？」

足に魔力を注ぎ茶髪の女の背後を取り、肩に手をかける。

? 2 「っ! ! やあ! ! ・・・っ？」

すぐに振り返り水の剣で斬りかかれそうだったので元のところへ

また移動した。

このままでは埒があかないのでちよつとした細工をしておいた。

鍊「はあ……それで人の家になんのようにだ？」

パチンッ

右手の指を鳴らし、俺は二人の仮面を粉々にした。

鍊「操緒……奏……」

仮面の下から現れた顔は俺の幼馴染の顔であった。

N e x t t o E X 5 ! ! !

EX4 人の家では仮面をとれよな？（後書き）

すみません〜〜なのはのほうで結構とられて

投稿が遅れました。

最近バイトを始めましてなかなか時間が取れないんですよ。
言い訳なんですけどね・・・

またいつ次回が出るか分かりません。

なのはの方しだいです。

あくまで主に執筆しているのはなのはの方ですから。
では〜〜

EX5 なんだこの異様な奴等は・・・？ (前書き)

久しぶりな投稿

もう自由気儘ですな

なんとなく投稿です
ではどうぞ

EX5 なんだこの異様な奴等は・・・？

静寂満ちる鳴桜邸のリビングは更に静まり返っている。

机を挟んで座るのは鍊の幼馴染の二人。

水無神操緒、嵩月 奏半日前までは三人の間にはこのような重い空気が流れていなかったのだが・・・

鍊「それで？どうして二人は俺を襲ってきたんだ？」

自分の頭を掻きソファで足を組みながら聞く鍊。

操「私達は今日ここに来る奴を捕獲しろって言われたから・・・」

鍊「捕獲ねえっ」

操「でも私達、相手が鍊って事気づかなかったのよ！！」

鍊「あんなに俺の声聞いてたのに？」

奏「そ・・・それは、タオルで耳を塞いだから・・・」

錬「・・・まあ襲ってきたことは別にいいや。実害無かったわけだし」

操「そんなことより錬！あんた最後のなんなのよっ！！あれじゃまるで私達みたいなの・・・」

錬「悪魔か？」

奏「うん・・・」

錬「まあそれは正解だが間違いでもあるんだ。改めて聞くけど、お前らは悪魔なんだよな？」

操・奏「うん・・・」

錬「なにしょぼくてんだ？・・・はは、まさか俺がそんなことでどう思ってたか？別にお前らを軽蔑しねえよ。」

操「ど、どうしてっ？私達人間じゃないし・・・」

錬「はあ～～操緒。お前は人間の定義はなんだと思う？」

操「そんなのいきなり言われてもわかんないわよ!!」

鍊「奏は？分かるか？」

奏「意思・・・かな？」

鍊「惜しいっ!! 非常に惜しい!! どうかの誰かさんと違って奏は賢いな〜」

操「むっ・・・それでなんなのよ!!」

鍊「俺は思うぜ。人間かどうかは心があるかないかだ。人としての感情、記憶。様々な感情つまり心を持っている事が人間としての定義だと俺は思う。肉体なんて二の次だ。だってそうだろ？背が違う。身体が違う。声が違う。ほらみろ。同じ肉体をもったやつなんていねえんだ。だから俺にしてみればお前ら二人の方が俺よりも人間らしいって思うね」

「。。。そうだ。お前らは俺よりもよっぽど人間らしい。中途半端な俺よりはよっぽどな・・・」

操・奏「／／／／／」

鍊「それで・・・えゝゝゝどこまで言ったっけ？・・・そうだ悪魔のところか・・・まあまず見てもらった方が早いか・・・二人とも悪魔化しろ」

鍊「よし・・・じゃあ二人とも久しぶりの対面だ。出て来いよ、アリス、アリア・・・」

操・奏「えっ！？アリス！アリア！」

鍊の言葉に目を見張る操緒と奏。その先には二人にとって懐かしいそしてもう会うことはできないと思っていた相手の姿があったのだから。

アリス「久し振りね、二人とも・・・」

アリア「ほんとだねゝゝ私たちのこと覚えてる？」

操「忘れるわけ……ないじゃない……」

奏「うん……」

涙ぐむ二人にアリスとアリアも考え深く感じるらしく、二人もつられて涙を流し始める。

その涙は再会の涙。キラキラと光り懐かしさに彩られている。

四人とも涙は止まらない。しかし止めようとはしなかった。

この涙は恥ずかしがるものではないそう思ったからだ。

だから鍊は特別な声を掛けることも慰める事もせずただ四人に再会の涙を流させたのであった。

鍊「落ち着いたか、二人とも？」

ひとしきり泣き喚いた後、操緒と奏は恥ずかしそうに顔を俯けた。

別に恥ずかしい事じゃないだろう。死んだと思っていた友達と再会したんだ。

泣いて当然だと思いがな？

鍊「それで？どうする、お前ら？今日は帰るか？」

操「うゝゝんどうする？ かなちゃん？」

奏「今日のところは帰ってもいいと思う。鍊君がそうだって事お父様とお母様に言わなきゃいけないし・・・」

操「それもそうよね。家のところも言わなきゃ・・・まったく誰からこの情報が流れてきたの・・・」

鍊「さあな。ま、とりあえず送るからよ、さっさと支度しろ」

夜道で女の一人歩きは危険だからな

操・奏「「ありがと、鍊^{くん}」」

／／／／「まったくこうゆうときだけ素直なんだから・・・奏は当然としても操緒がな・・・」

翌日――

鍊「グッモ～～～ニング」

元気よく挨拶し、教室へ突入する方法をとった俺。そんな俺に

奏「おはよう、鍊君・・・」

操「おはよ、鍊」

話しかけてくるのは、操緒と奏の二人。ま、こいつらとは幼馴染だしな、そういえばクラスの連中とはまだあまりはなしてねえや・・・

？「なあ、ちょっといいか？」

誰だこいつ？

話しかけてきたのは、茶髪でアホ面した男。うわぁなんかみた感じ

からして、主人公とかにはなれねえやつだな・

とまあそんな失礼極まわりないこと考えてもしかたねえか。

錬「なんだ？」

？「俺は、樋口琢磨。神埼って呼んだほうがいいか？」

錬「いや錬で構わねえよ。俺も琢磨って呼ぶことにする。それで琢磨なんの用だ？」

樋「いや〜お前と嵩月と水無神って仲良いよな？」

錬「ああ〜なるほど。そりゃあ俺らは幼馴染だからな」

樋「なるほど・・・だから嵩月もお前のことは怖がらないわけか・・・」

錬「やっぱりあいつずっとあんな性格してんのか・・・」

奏の方へ向く俺と琢磨。

樋「ああ、あの容姿だろ？結構な人気があって告白とかもよくされていたらいいんだが、その人見知りする性格があるから、恋人関係はゼロ。しかも水無神が嵩月のお目付け役みたいなポジションにいるせいか話し掛け辛いもあるな・・・」

鍊「はぁ・・・まあ操緒は昔から奏を可愛がっていた所があるからな・・・」

樋「気をつけろよ・・・あいつらめっちゃ美少女だからな。学校中の男子が狙ってるぜ？」

鍊「そういわれてもあいつらのことだ。とやかくいわねえよ」

樋「ふう〜〜ん（鍊の様子からするとあまり意識はしてねえみたいだな。だがあの二人は明らかにこいつの事を意識してるよな・・・なるほど鈍感か・・・）」

なんか唸りだす琢磨。

樋「・・・ところでよ鍊。幽霊とかに興味ねえか？」

は？こいつはいきなり何を？

鍊「何だ急に？」

樋「いや俺こうみえてオカルトマニアなんだ。だからよ」

なるほど仲間が欲しいわけか・・・生憎だが俺はもう幽霊は見飽きているからな・・・

？「もう～～樋口、鍊を変な道に引き釣り込まないほうがいいよ」

樋「大原、変な道とは何だ！変な道とは！！」

オカルトの話しになっていきなりテンションが最高潮になっていた
琢磨を止める声がした。

どうやら琢磨の知り合いらしいが・・・大原？

大原♪大原♪本気になったら大原～～♪
ってやつか？

？「ちよつと樋口のせいで笑われてるし！！」

樋「俺のせいだよ!!」

鍊「くくっ……あ……悪い悪い……それでえっと……」

一頻り自分の中のネタで笑ってその大原をみた。

? 「大原 杏だよ。同じクラス、鍊って呼んでもいい?」

鍊「ああ、構わないぜ……それで杏は琢磨と知り合いなのか?」

杏「不服だけどね……中学が一緒だったんだよ」

樋「不服ってヒドッ!!」

杏の悪びれない解答にグサッと精神ダメージを受ける琢磨。
お前ら……仲良いな……

鍊「仲いいな? 何お前ら、付き合ってたの?」

杏・樋「そんな事あるわけない!!!」 「あは、そう見える?」

正反対の事言ったな・・・

杏「変なこと教えるな!!馬鹿!!」

樋「ごふっ!」

おおくくく琢磨が見事な軌道を描いて空中を飛んでる・・・すごいな杏

杏「鍊!今の樋口の馬鹿な戯言だからね!!」

鍊「わ、分かった」

杏の必死な物言いに頷くしかなかった。

?「ちよつといいかしら?」

今度は誰だ??千客万来だな!!

杏「あ、玲子ちゃんおはよう」

また杏の知り合いか。ということは樋口ともか……。

玲「初めまして、クラス委員長をしている佐伯 玲子よ。神埼 鍊。ちよっと話があるの、付いてきてくれる？」

なんだ？こいつの物言いは？上から目線かよ……

鍊「やだ……」

玲「は？」

鍊「だから……やだ」

玲「……仕方ないわね……（プルル……）お兄様、どうしましよう？」

こいつ今度は電話し始めたぞ……おいここ学校だぞ。つつーかお兄様って……へんな呼び方だな……

玲「はい……はい……分かりました……（プツ）……神

埼。来なさい・・・」

鍊「だからやだって（機械仕掛けの魔人）っ・・・・・・・・どこだ・・・」

こいつ・・・アスラ・マキーナ機巧魔人の事を！
こっち側の人間か・・・

玲「こっちよ・・・」

鍊「ちっ・・・」

素直に聞くのが癪に障るが、まあいい。俺を無理矢理来させるんだ・
・その奴がどんな顔をしているか見てやろうじゃねえか・

洛芦和高校第一生徒会――

例えるなら白。いや例えなくても白か・・・・。

なんか厄介事な匂いがする・・・

？「ようこそ・・・第一生徒会へ・・・」

偉そうに言ってきたので、そいつの顔を拝んでみた。
思わず頭を抱える・・・こいつ疲れるんだよ・・・

鍊「はぁ・・・お前か・・・玲士郎。そういや考えてみると玲子、
お前の堅物なところと雰囲気こそっくりだ」

玲士「お久しぶりです・・・鍊さん」

堅い・・・相変わらずだな・・・

玲子「お兄様？神埼とお知り合いなのですか？」

ああ、こいつ俺の事覚えてねえか・・・無理ねえな、あの時は緊急だったし・・・

玲士「そうか・・・玲子は覚えてないか・・・この方神埼 鍊さんはわたしたちの命の恩人だ・・・」

玲子「ええっ!？」

驚いちよる、驚いちよる・・・

玲子「わたしが操縦士ハンドラーになった時のことを覚えているか？」

玲子「え、ええ」

玲子「その時わたしたちは鍊さんに助けられたのだ。お前は気絶していたから無理ないが・・・」

玲子「そうだったのですか・・・」

鍊「それで俺を態々呼び寄せたんだ・・・世間話をしに呼んだんじゃないんだろう？」

玲子「はい・・・鍊さんと同じクラスの水無神 操緒と嵩月 奏を知っていますか？」

鍊「知っているも何もあいつらは幼馴染だ。それが何だ？」

玲士「ならば無礼を承知で言います。二人とは接触しないで下さい・」

鍊「・・・どうゆう意味だ？」

玲士「言葉通りです・・・鍊さんとあの二人がもしものことがあればあれ（・・・）が生まれるのです。分かっておいででしょう・・・」

脳裏に浮かぶあの光景。玲士郎たちと会った時の事・・・

鍊「・・・」

玲士「わたしはあれを生み出さないためなら何でもします・・・それが哀音との約束ですから」

玲士郎の話しを腕を組みながら聞き、俺はその隣に佇む色素の薄い同年代の少女を見る。

哀「・・・」

哀音はただジッと俺を見つめるだけだった。

玲士「しかし鍊さんが反対されるならわたしたち第一生徒会は、あの二人を（そこまでにしておけよ、小僧・・）っ！」

鍊「俺はあいつらをただ悪魔ってだけで滅したりはしねえ。あいつらの幼馴染でもあるからな。それで何だ・・・二人を・・・どうするって？」

俺は長年相棒として連れ添ってきた殺気をの一欠けらを玲士郎にぶつける。

玲士「っ！！」

鍊「・・・勘違いするなよ。玲士郎。俺は、確かにお前らを助けた。だがそれは偶々だ。だからあいつらとお前らどっちを選ぶと言われたら迷わずに俺は選択する・・・じゃあな・・・」

それ以上は言わずに生徒会室を後にした。

side out

玲士郎 side

鍊さんが部屋を去り、残ったのはわたしと玲子それに哀音のみであった。

玲子「お兄様！いいのですか！神埼にあんなこといわれて」

玲子がわたしに言っているがわたしは今話す気分じゃなかった。だが無視するわけにもいかない・

玲子「玲子・・よく聞きなさい。わたしが操縦者ハンドラーなっていくつだ
い？」

玲子「いきなり何ですか？・・・一年・・・半と記憶してますが・
・」

玲士「ああ・・・それくらいだろう。だがあの人鍊さんは五年以上

ハンドラー
も操縦者なのだ・・・」

玲子「そ、そんな！だったらあいつは既に、操縦者じゃない筈じゃ？」

その通り・・・普通の操縦者なら五年、それ以上の期間の間操縦者であり続けることなど不可能なのだ。だが・・・鍊さんはそれが出来る・・・

玲子「それが可能なんだ・・・わたしも詳細は分からないが、鍊さんは五年以上の間操縦者なのだよ・・・」

玲子「そ、それじゃあ機巧魔人を使う中で最強は・・・」

玲子「ああ、鍊さんだろうな」

機巧魔人の操作は、ゲームのように容易いものではない。それまでの経験が一番に繋がり、いかに操るかだ。それが鍊さんは突出している・・・わたしの翡翠でも数十秒も持たないだろう・・・

side out

アリア「ねえ、良かったの？ あんなことって」

錬「ああ俺はあいつらを護る。お前達に続いてあいつらまでなくしてたまるか・・・」

アリス「錬・・・そういつてくれるのは嬉しいけど・・・」

錬「安心しろ。お前らの魂は、絶対つかわねえから・・・」

アリア・アリス「・・・・・・・・」

錬の言葉が二人の胸に突き刺さった。彼の際限なき優しさは、嬉しい。だがそれが意味することを考えると、複雑な心情だ。

今日も楽しい、楽しい授業が終わり帰途に着く。てっきり玲士郎から何かのアクションが来ると思っていたが、何も無く拍子抜けだった。

今は一人だ。正確にはアリスとアリアを入れると三人だが・・・。二人はなにやらずっと仏張面して話しかけてもつゝゝんと拗ねられ無視。

俺ちょっと傷ついたぞ・・・

ちなみに操緒と奏は何やら用があるらしく、一緒ではない。だが後で会う約束をしているのでまあいいだろう。もちろんあいつらの事とか、俺の事に関しての相談会だ・・・。

アリア「ほら・・・鍊ついたよ・・・」

いい加減、機嫌直してくれアリア。アリスお前も、その腕組みながら睨み付けないでくれ。マジで怖えゝ。

鍊「ああ・・・」

玄関を潜り、靴を脱いで俺はリビングへと向かう。アリスとアリアもそれについて来た。

リビングのソファにドカッと座り、二人にも座らせる。もちろん二人は霊体なので、そんな事出来ないのだが、まあ格好的にだ・

鍊「なあ・・・俺なんかお前らに悪いことしたか？」

アリア・アリス「・・・・・・・・」

鍊「それなら謝るからよ。機嫌直してくれ・・・」

主に俺の精神状態のために・・・
無言のプレッシャーとかもう感じたくねえよ・

アリア「・・・・・・・・はあ・・・鍊。さっきの事の意味分かってるよね？」

さっき？

鍊「アスラ・マキーナ機巧魔人の事か？」

アリア「そう・・・わたしたちの魂を犠牲にしないでくれるのは嬉しい・・・けど・・・」

アリス「それじゃあ、鍊が・・・」

鍊「その事か・・・だからお前ら、不機嫌だったのな・・・」

はぁ・・・全く・・・優しいなこいつらは・・・

鍊「俺の痛みとお前らの魂・・・どっちを取るかなんて考えることでもないだろう？」

アリス「でもっ！」

鍊「悪いな、二人とも。心配かけて。だが俺はこれを変えるつもりはねえ・・・力の代償がお前らの魂なんて笑えるかよ・・・。それなら俺は・・・」

アリア「・・・ごめんね・・・」

鍊「あ？」

アリア「わたし鍊にそういつてもらえて嬉しい。例え鍊のためでも感情を失うのは怖い……だから……」

鍊「何言ってるんだ。お前らはもう十分な対価を支払っているんだ。自由をな……そんな二人からこれ以上奪えるかよ……」

アリス「ありがとう……鍊……あなたがわたし達のパートナーで本当に良かった……」

鍊「よせよ……らしくねえ……」

ピンポーン

こんな時間に誰だ？

俺はソファに沈みかけていた腰を上げ、来客者を迎える。

鍊「はいはい……誰ですか……っとお前らは……！」

扉を開けた瞬間俺がみたのは、黒の礼服を着た顔に傷があったり、手に傷があったりと所謂危ない奴らがなぜかは分からないが頭を下げている異様な光景だった。

EX5 なんだこの異様な奴等は・・・？ (後書き)

やっちまったぜ。

まあ楽しいものにするのでよしとする
では、また次回・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8529p/>

Asura Cryin' 優しい物語

2011年11月14日20時51分発行